

十

廊下に出た私の足元に、エンプーサが歩み寄って来る。

私は、そのあくまでも純粹に黒い毛皮を持った黒猫を見詰め、暫し、足を止める。

エンプーサ。

ギリシア神話に登場する魔女の女王ヘカテが、黄泉の国タルタロスを徘徊する時に付き添う小魔女。

私は、その古代ギリシアの神話を思い出す。そして恩師がその名を黒猫につけた時、ヘカテを誰になぞらえたのであろうかと思いを馳せる。

彰子であろうか？……それとも？

そして恩師にとっては、ヘカテによって苛まれる黄泉の国の住民とは、いったい誰を差しているであろうか？

私は既に答えを得ていた。

私の内から欲望が生じる。身体を苛まれるように、そして、恩師がそうであったように。

エンプーサが歩み去る。

十一

夜。

私は、かつては宗方と彰子の寝室であり、今は彰子一人の寝室となっている部屋のドアを開ける。

ノックも無しに入り込んだ私を、寝支度をしていた彰子が一瞬驚きの表情を浮べて見返すが、すぐにそれは見慣れた微笑となり、私はそこに欲望の臭いを嗅ぎ取る。

夜着のまま、ベッドの横に座っていた彰子が立ち上がり、私の言葉を待つように見詰め返してくる。

「日記、読ませてもらいました」

口元にわずかばかり浮べた微笑みを深めながら、彼女が問い返してくる。

「そう……、最後までですか？」

「いえ、雅美が初めて先生に抱かれたところまでです」

「ああ……あの日の事は今でもはっきりと覚えていますわ……。あの日から私と主人、そして雅美の生活がはじまったのですから……」

彰子が言葉を切り、その微笑みが妖艶な色合を帯びる。

「で、いかがでした？」

私は、彼女の視線をまっすぐに見返す。

「情欲を感じました」

暫しの沈黙の後、彰子が答える。

「雅美を呼びましょうか？　そして三人で……」

私は彼女に歩み寄る。

「ええ、そうして下さい。でも、その前に……」

私は彰子の身体を抱き、恩師、宗方も嗅いでいたであろう、薔薇の香りを胸に吸い込む。

「まずは、貴方からだ……」

私は彰子の耳に口をつけて囁く。至近の距離で、彼女が私に振り返る。

「昼間、あれほど激しくお抱きになったばかりなのに……」

その声には、微かなからかうような調子があった。

「抱くとは言っていません」

私は口調を変える。「お前を蹴りたいんだ」

腕の中の彰子の身体が一瞬、硬直する。

「まだ私の身体は、昼間貴方に責められて、疼いていますのよ……」

「わかってる、だからこそその身体、苛んでやりたいんだ」

「……恐いお方……まるで……」

彰子が言葉を切り、私はその後を継ぐように言う。

「……まるで、亡くなった主人のよう、か？」

彰子が私の唇を食る。

私は、その彼女の顔を手荒く引き離し、命じる。

「服を脱げ」

夜着をするりと脱ぎ下ろし全裸となった彰子の全身には、先程の言葉どおりに赤い鞭の跡が縦横に走っていた。その傷跡の残る身体を私に見せる為に、彼女は私の目前で身体をぐるりと回してみせた。

乳房、背中、そして豊かな尻にも鞭の跡は残り、乳首にははつきりと私の歯形が残っていた。私はその乳首をつまみ、強くひねり上げる。

彰子が痛みに顔をしかめる。しかし指の狭間では乳首が固くなりはじめていた。

「道具を用意しろ」

私は彼女に、自分の身体を騷る為の道具を出す事を命じる。

言葉に従い、私に背を向け屈み込んで、ベッドの下から陰具の収められた箱を取り出す彰子の姿を、私は背後から見詰める。

黒髪の中から覗く白いうなじ、鞭跡が赤く走る背中、腰のくびれと傷つけられた尻。宗方の書き残した日記と写真が、私の脳裏に蘇り強い欲情を引き出す。

彰子が箱を開けて中から陰具を取り出し、ベッドの上に並べて行く。二組の手錠、鞭、木製の陰茎、ロープ、そして縫針の収められた筒。

彰子が、床にひざまづいたままに私に向き直る。

「ご用意ができましたわ……貴方」

私は彼女の前に進み、その艶やか黒髪を掴んで上を向かせる。

「ああ！」

欲情に滾りはじめている瞳が私を見上げる。

私はその瞳から視線を外すことなくスポンのチャックを下ろし、勃起した陰茎を彼女の目前に突き出す。

その亀頭の部分は、漏れだした粘液によって既に湿り気を帯びていた。

彰子が顔を寄せ、唇を割ったその舌先で、張り詰めた剛直の表面を舐め始める。

赤黒い肉の拳の上を、彼女の唾液に濡れた舌がはってゆく。まるで幼子が母親の乳首を吸うときのように唇が動き、音を立てる。先端の窪みの中に差し込まれた舌先が、そこから滲み出している粘液を舐め取る度に、私は鋭角的な快感を感じる。

充分に私の「味」を堪能した彰子が、陰茎を奥まで啜え込もうとして顔を前に動かしたとき、私はその頭を押えつけ、腰を引く。

「背中に手を回せ」

「手錠をかけて下さるの」

「そうだ。お前があ頃、毎夜されていたように」

私に背を向けた彼女の、背中であ差された両手首に私は手錠を掛ける。自由を奪う金属の輪を鳴らしながら、彼女は命じられる前に自分から床に這い、高く尻を掲げる。

「翹って……翹ってください」

嗚咽の色合いが混じった声で彰子が囁き、そして下肢を開く。

私の目前に、尻の狭間の既に愛液の兆しがある秘部と、後孔が晒け出される。

屈み込んだ私は、剥き出しになっている秘部を更に指で広げ、その奥に昼間私が刻み込んだ鞭跡を確かめる。内部の敏感な肉襞に刻まれた傷跡は、陰核のすぐ下からはじまり、尿道の小さな口を縦断して、膣口を越え、後孔のすぐ前で消えていた。

傷跡に人差指を這わしてゆくと、滲み出した愛液に指がぬめった。そのまま指を後孔にまで這わし、窄まった表面に触れ、愛液をまぶしながら愛撫する。

後孔が、喜ぶようにひくひくと蠢いだしたとき、私はその奥に向かって指を押し込む。

彰子の低い声とともに、後孔が指を締めつけてきた。

指を第二関節辺りまで挿入し、中をまさぐるように動かしてやると、彼女の声にねだるような調子加わる。私は指を折り曲げ、狭い管の内側の筋肉と粘膜を押し分けるようにして、擦り上げる。

彰子がぐぐもった声を漏らしながら、両手に繋がれた手錠を鳴らす。私は腹の中の粘膜を引き出すかのように、その輪状の筋肉を持ち上げ、残酷に押し開きながら指を抜く。

鞭を取ると、その気配を感じたのか、彰子が後ろを向き、私を見詰める。その目には恐れにも似た欲情の翳りがあった。

「ああ……また、また私は鞭打たれるのですね」

囁く彰子が尻を蠢かす。その尻に向かって私は、鞭を振り下ろす。

悲鳴と、分厚い肉が弾ける時の音が寝室に響き、昼間私が刻んだ鞭跡の上に新たな赤い線が打ち込まれる。

傷つき、赤く火照り、うっすらと汗が滲む白い尻に、私は容赦なく鞭を打ち下ろしつづける。

汗が細かい飛沫となって散り、その色が薄い紅の色となっていく。

私が縦方向に鞭を振るった時、彰子が甲高い悲鳴を上げ、哀願の声を叫んだ。

「あつ、そこは許してっ。一日に二度もなんて辛すぎます……」

私はその言葉を無視し、更に鞭を振り下ろす。

彰子が、腰と背中をよじらせながら苦痛に耐える。鞭が敏感な肉と粘膜をなめす度に、鋭い音と泣き声が混ざった悲鳴が上り、私はその声と、よじれる彼女の身体を楽しみ、微笑みを浮べる。

何度もくり返して秘部と後孔を打たれる苦痛に、彰子の反応が鈍りだした頃、私は鞭を投げ捨てる。

私は、彼女が顔を向けているベッドに腰を下ろし、涙に濡れるその顔を見詰め、欲情の粘液を

したたるほどにまとわり付かせている陰茎を彼女の目前に突き出す。

彰子が、餓えた者のように唇で陰茎をとらえ、激しく口を動かし、舌を絡め、吸い上げる。それは私の情欲を開放し、昂ぶった嗜虐の意志を少しでも和らげようとする彼女の抵抗のようである。えあつた。

私はその意図を挫くかのように、彼女の肩を押しつけ、陰茎を引き出す。彰子の唾液で濡れ光った陰茎が、中断された快楽に痙攣し、更に情欲が昂ぶる。

新たな涙が彰子の頬に流れる。

私は、ベッドの上に並べられた陰具の内から、彰子と雅美の愛液を幾度となく吸ったであろう木製の巨大な陰茎を取り、彼女の背後に回る。

掲げられた尻の前に膝を付き、傷ついた尻の狭間を見る。

秘部と、その下の後孔の表面には生々しく赤い傷が刻まれ、うつすらと血が滲んでいた。指でその傷をなぞるようにすると、苦痛に尻が震える。

私は手に持った、木製の巨大な亀頭を、小さく窄まった後孔に押し当てる。

私の意図に気付いた彰子が叫ぶ。

「止めて、そんな、そんな事。無理です、無理ですわ、裂けてしまいます」

私は、後孔の窄まりに押し付けた淫具をねじり込むように回す。

「これを尻には入れられた事はないのか？」

「はい。大きすぎますわ……」

「試してみるとするか」

「いやッ」

私は逃げようとする彼女の髪の毛を掴み、強く手前に引く。顎が上がり、苦しげな息を彼女が吐き、そして私は木製の陰茎を強く後孔に押し付ける。髪を掴まれ、逃げることも出来ない彰子が悲鳴を上げる。

「お願い、止めて下さい……裂けてしまいますわ。他の、他の責めならお受け致します……ああっ、痛いっ、痛いです」

私の押し付けた木製の亀頭は、彰子の後孔を強く押し、歪ませる。亀頭の太さに後孔が完全に隠れてしまう程に、その陰具の直径は太い。

亀頭の丸い先端がわずかに潜り込みはじめる。そして後孔の霞んだ肌色をした粘膜が張詰め、器具の埋没に従って大きく開かれていく。

彰子が苦痛の叫びを上げる。

「ああ！、つらい、つらいですわ」

だがその彼女の声も、今の私にとっては媚薬であった。私の中で嗜虐を糧とする獣がその血走った瞳を開く。

彰子が、髪をつかまれた頭を激しく振り、許しを乞う声と悲鳴を漏らし、全身から苦痛の汗を流す。

私は、じりじりと木製の器具によって犯されていく彰子の尻を見詰める。

張り詰めた後孔の粘膜が、なめらかに研き上げられた陰具の表面に食い付き、太股が苦痛に痙攣しはじめる。彼女の吐く息は短く、深く、そして熱い。

木製の陰茎の亀頭が半ばあたりまで飲み込まれ、その最も太い部分が近付き、私は陰具を押し込む手にいつそうを入れる。

「あああああ！」

彰子が甲高く、長く尾を引く悲鳴を上げ、白い太股に一筋の血の赤い線が引かれる。

裂けた後孔の下端から流れ出す血が、陰具の表面を濡らし、秘部に垂れ、彼女は木製の亀頭を受け入れる。くびれの部分を更に押し込むと、すぐ下の秘部が、薄い肉の壁の向こうに啞えこんだ陰具によって内部から盛り上がる。

私は更に、細い肉管を無理矢理に押し広げながら、陰具を根元近くまで埋め込む。

彰子が苦痛の汗に濡れた尻を振る。

私が掴んだ髪の毛を放すと、がくりと首を垂れた彰子が、泣き声が混ざった荒い息に背中を震わせる。

私は、彼女の太股に流れる血を指に拭い取り、その乾きはじめている赤い粘つきをその尻に塗り付ける。

血と、肌の汗とが混ざり合った。

私は、彰子の尻の狭間から覗いている陰具の下端を掴む。

「ひっ」と彼女が声を上げ、後孔に食い込んだ陰具の、そのわずかな動きにさえも敏感に反応する。

私は陰具をゆっくりと引き出しはじめる。

「だめ、動かさないで！　お願い……」

彰子が叫ぶように言うが、その声もすぐに、唇を噛みしめて苦痛に耐えるうめきとなった。

秘具が、手に粘りつくような強い抵抗感を示す。後孔の粘膜が引きずり出されるようにめくれあがり、内部の暗色がかつた赤色を見せる。裂けた傷口から新たな血が流れ、背中を手錠によって拘束されている手が、その苦痛に握り締められる。

彼女の漏らすうめきの声が押し殺したものとなって、切れ切れの息がその唇から漏れる。

私は陰具をその亀頭の根元近くまで抜き、そして更に引く。亀頭の部分が後孔からじりじりとあらわれ、筋肉が張り詰める。尻が、再び押し開かれる苦痛に震え、唇からのすすり泣きの声が高まる。

私は、陰具をその一番太い箇所まで引き出してから、逆に押し込む。その動きを何度か繰返すうちに、抵抗がわずかだけ少なくなる。陰具を操る手を早める。

「あああ！ 許してっ」

彰子が尻を蹴られる苦痛に叫びを上げるが、私は更に陰具を動かす手を早めていく。

嗜虐の興奮による、熱く、荒い息を吐く私は、陰具に擦られ、裂かれた彼女の血まみれの後孔を見詰める。私の想像の視野の中で陰具は、私の固く張り詰めた陰茎となり、性の飛沫を彼女の体内に注ぎ込むかのように激しく、私は陰具を動かしつつづける。後孔の抵抗は次第に少なくなり、柔らかなゴムを切り裂いていくときのような手応えに変じた。

彰子の上げる苦痛の声に、別の調子が変わりだした。

その声と息遣いが、性の交わりの際に女が上げるであろうものに変わり、それが苦痛の声と完全に置き換わったとき、彰子の背中で強く握り締められていた手の力が抜け、だらりと垂れ下がった。

ゆっくりと深く長い息を吐きながら、彰子が床に身体を倒していく。

私は、彼女の尻に埋めこんだままの陰具をそのままに腰を上げて、気を失い、うつ伏せで床に倒れ込んだその身体を見下ろす。

彰子の全身は、尻の苦痛によって絞り出された汗に濡れ、鞭打たれた傷が縦横に走っていた。そしてその開かれた尻の隆起の狭間には、血で汚れた陰具が食い込み、そのすぐ下の秘部では、愛液のぬめりと後孔からの血が混ざり合っていた。もし昼に彼女を抱いていなければ、私はその光景に強い射精の衝動を覚え、気絶した彼女をその場で犯していたであろう。

しかし、私の中に潜む嗜虐と情欲を糧とする獣は、まだ飽食してはいなかった。その獣は飽くことなく、悲鳴と血と、そして陵辱を求めつつづけていたのだ。

私は、隣の雅美の部屋に通じる寝室の壁に拳を打ち付ける。

「雅美、そこで聞いている事は知っている。こっちに来るんだ」

雅美が寝室の入口に現われる。

まだ白と紺のメイドの服を着けたままの雅美は、おどおどした視線を私に向け、そして床に倒れ込んでいる彰子の姿を見る。その手が口元に当てられ、悲鳴を押し殺す。

「入れ」

私は立ちすくむ雅美に命じる。

「ひどい……」

床の彰子を見詰めながら、震える声で囁くその彼女の背後に私は回り込み、脇の下から回した両手で乳房をつかむ。

強く絞り上げるようにもみ上げながら、唇を耳に寄せる。

「おまえはどんな責めがいいんだ？ 彰子のように尻を裂いてやろうか」
「いやっ」

雅美が腕から逃げようと身体をよじらせるが、私は更に両手に力を込め、乳房をひねり上げる。雅美が苦痛に表情を歪める。

私は彼女を片手に抱きしめたまま、ベッドの上のロープを掴み取る。それを白い服の上から胸に回し、上下から乳房を挟み込むようにして背中で交差させ、その細身の身体を引き絞るように強く結ぶ。

胸にロープが、その姿が隠れる程に深く食い込み、雅美が苦しげな息を吐く。決して大きいとはいえない彼女の胸がそれによって強調される。

私は彼女の肩を掴んだ両手で押し付けるようにして、上半身を拘束された彼女を床に座らせる。私がベッドの上の縫針が収められた筒を取ると、雅美は囁くように呟いた。

「ああ……。針……」

その時の彼女の表情は、これから自分に加えられる苦痛への恐怖に諦めに彩られている。

その表情が更に私を昂ぶらせる。

筒の蓋を開けると、アルコールの臭いが漂いだした。



私はロープによって引き絞られ、盛り上がった雅美の片方の乳房を握り、服の上から乳首を探り当てようと、その先端に指をはわす。白いメイドの服の感触の下に、下着の感触、そしてその下の乳首のわずかな盛り上がりを探りあてる。

私は、服の上から乳首をつまみ上げ、その指の狭間の、布地の向こうの乳首に縫針の先端を押し当てる。

雅美が目を閉じると、私はその手を止める。

「目を開ける、目を開けて、お前の乳首に針が突き通るところを見るんだ」

雅美が目を開き、その瞳が潤みはじめ。

私は針を食い込ませていく。

白い服に針の鋭い先端がすべりこみ込み、下着に触れる。少し力を入れると針は、固い生地を突き通り、そしてその向こうの乳首に食い入る。

「あっ！」

その瞬間、彼女の表情が苦痛に歪み、歯が噛み閉められる。しかしその目は魅入られたように、

徐々に自分の乳首の中に食い込んでいく縫針を見詰めている。

乳首に突き通った縫針が反対側からその先端を覗かせたとき、私はもう一本の針を筒から振り出す。

二本の針によって、着衣ともどもに両方の乳首を縫われた雅美が顔を伏せる。だがその顔を再び上げたとき、彼女の涙を湛えた瞳には、はつきりとした欲情の色合いがあった。

雅美が私の股間に顔を寄せてくる。

「させて、舐めさせて下さい……」

私は下半身にまとわりついてくる彼女を引き離し、傍らの床に倒れたままの彰子に向直る。気を失っていてもさえ、彼女の後孔は強く木製の淫具をくわえ込んでいた。屈み込んだ私は、その尻の狭間に埋った木製の陰茎を抜き出しにかかる。

陰具が引き出されるにつれて、うっすらと新たな血が傷口から流れ出し、床を汚す。その痛み彰子が目を開ける。苦痛からの救済であった気絶から醒めた彼女に、新たな苦痛が襲いかかる。身体がよじれ、背中で拘束された両手の手錠が音を鳴らした。

巨大な陰具が彰子の後孔から引き出されてくる。その猟奇的な光景を、雅美が食い入るように見詰る。その顔は明らかに性的な興奮によって紅潮していた。

陰具が抜き去られた後の彰子の後孔は、暫くの間口を開けたままとなり、赤く擦れたその内部を、私と雅美の目に曝け出した後、徐々に窄まりを回復していく。

彰子が顔を上げ、着衣のままにロープで縛られ、両の乳首を針で縫われている雅美の姿を見る。

「雅美ちゃん……」

囁くように言い。そして新たな涙が頬を伝う。

私は床に転がった鞭を拾い上げ、彰子の尻に向けて振り下ろす。またもや甲高い悲鳴を上げる彼女に私は命じる。

「尻をあげろ」

躊躇する彰子の傷ついた後孔に向けて鞭を振る。

「許してっ！」

彰子が叫び、傷つき腫れた尻を再び私に向けて掲げた。

私は、床に座る雅美の首筋を掴み、彰子の掲げた尻にその顔を押し付ける。

「ほら、そんなに舌で奉仕したいのなら、奥様を舐めてやりなよ」

「ああ……」

その声を聞いた彰子が、溜め息のような声を吐く。

雅美が、鞭の跡が縦横に走る彰子の尻房に、おずおずと伸ばした舌を触れさせ、舐めはじめ。鞭跡から薄く滲みだす血と、汗に濡れた尻に雅美が丹念に舌を這わすと、彰子が傷口に触れる

舌の感触が生み出す鈍い苦痛に尻を震わせる。

雅美が顔を彰子の尻の狭間に向け、その二つの窄まりの惨状を見詰める。

「ああ……奥様、ひどく傷ついていますわ……」

「言わないで、雅美……。恐ろしいの……」

「おかわいそうに……」

しかしその言葉にもかかわらず、雅美の声は欲情を滲ませたものであった。

「なぐさめてさしあげますわ……」

雅美が舌を彰子の秘部に伸ばす。舌先が触れた瞬間、彰子が苦痛ともつかぬ声を上げた。

雅美が目前の秘部に息を吹き掛けるように囁く。

「痛むのですか？」

「優しくして……」

彰子が呟くと、雅美が唾液で湿した舌で秘部に触れ、丹念に舐めはじめた。赤く腫れた襞に刻まれた鞭跡の上を這い、血を滲ませる膣口の表面を擦り上げて、陰核を軽く弾くその動きは、はつきりとした愛撫のものであった。

彰子は痛みに疼く秘部を這い回る、雅美の舌によって鈍い快楽を覚えはじめる。痛みが快感を助長し、わずかに開いた唇から溜め息が漏れだす。

雅美は、その彰子の声を聞き、舌の動きを強めていく。

膣口から滲みだす愛液と、雅美の唾液が混ざり合い、そのぬめりを絡め取った舌先が、持ち上がり固くなりはじめている陰核に触れる。

雅美の舌が蠢く。

彰子のはつきりとした快楽の息を吐きだした頃、雅美の舌が彼女の後孔をとらえる。

彼女は表面の傷跡を舐め、そして裂けた傷口にも舌を這わせていく。

「痛いわ……もつと、優しく……」

彰子に雅美が、欲情に掠れはじめている声で答える。

「裂けていますわ……奥様のこゝ……」

「ああ……」

彰子がすすり泣き、首を振る。

雅美が後孔の傷口に再び舌を伸ばし、舐めはじめる。

私は、彰子の尻の狭間を後ろから舐めつづけている雅美の、スカートをめくり上げる。

床に這った雅美が腰を持ち上げ、私の目前に太股を開く。

「して……翳って下さい……」

振り返った雅美がねだり、白い下穿きに包まれた股間を私に向かって突き出してくる。その開

かれた股間に張り付いた白い布は、奥から滲みだしている愛液で汚れていた。

私は、雅美の背中が覗くほどに大きくスカートをめくり上げ、その尻をつかむ。

雅美がもう一度振り返り、囁く。

「お願い……」

欲望が昂ぶる。

私が雅美の腰から下穿きを剥ぎ取ると、彼女は愛液がしたたるほどに濡らしている股間を大きく開いた。

股間と太股がつくりだす台形の部分を二つに割る肉の合せ目から、その奥のまだ薄く繊細な感じさえも止めている褻が覗く。そして彼女のその部分は、彰子と同様に剃り上げられ、初毛さえもない完全な無毛であった。

「お互いに剃りあったってわけか……」

雅美と彰子、その二人が互いの下腹部に剃刀を当てあっている光景が、一瞬脳裏を過ぎる。

私は、雅美の肉の割れ目に指を掛け、引き裂くように開く。柔らかな粘膜と筋肉によって形作られた膣口が弾け出し、まだ処女のその肉穴は、成熟した女の滲ませるような濃く白濁した粘液によってべっとり濡れていた。

彼女が私を挑発するかのように、後孔を窄め膣口を蠢めかして見せる。

私は、縫針の収められた筒を持ち、広げられた尻の前に腰を据える。右手の中指で、陰核に触れ、ゆっくりと押しつぶすように指の腹でこね回してやると、指に絡みついた愛液がぬめり、その感触の中で持ち上がった陰核の固さが際立った。

雅美がすすり泣くような声を上げはじめる。

陰核を人差指と中指でつまみ上げ、包皮をずり下げると、濡れ光る瑤瑤色をした半球がその狭間から覗き、ゆっくりと揉み上げるように指を動かすと、彼女の太股が細かく痙攣する。

「ああ……もつと……」

彼女が喘ぎ、私は愛液に濡れた左手の中指で後孔の表面に触れて、ぬめりをまぶし、そして指を挿入する。後孔が窄まり、受け入れた指を強く締め付けてくる。細い管の内部を擦り上げながら、その動きと同調させて指でつまんだ陰核を、揉むようにして刺激すると、秘部から零れ落ちたしたりが後孔を颯る指に垂れ下り、雅美の喘ぎの聲が高まる。

私は、充分に彼女から欲情をひきだした後、指を秘部と後孔から離す。

雅美が恨みがましい声を上げて太股をよじり合せる。

私は、床に置いた筒から縫針を振り出す。その気配を感じた雅美が、私に振り返った。

「針……?」

「そうだ」

「ああ……」

雅美が顔を伏せる。

私は、左手で雅美の外側の肉壁にふれ、その表面に縫針の先端を当てる。彼女の太股が緊張に震え、私は針をそこに突き刺す。

くすんだ肌色をした壁の表面に、血の半球が滲みだし、雅美が悲鳴を上げる。

針を持つ手に力を加え、押し進めると、彼女の悲鳴が鋭い苦痛にくぐもったものとなり、太股が閉じる。

針の銀色に血の赤が映える。

私は、壁に突き刺さった針をそのままに、二本目の縫針を筒から振り出す。

太股の開きが小さくなつた為に、閉じかげんとなった外側の壁をかきわけ、愛液に濡れ光る桜色をした粘膜を剥き出しにし、繊細な壁を指でつまみあげ、そして針先を当てる。

「ゆ、許して……」

雅美が涙で掠れた声で訴える。

私は容赦なく針を進めた。

雅美が苦痛に耐える押し殺された悲鳴を漏らしながら、細かく太股と尻を痙攣させる。

だが、私のつまみ上げている壁は滲み出しつづけている愛液にぬめっていた。

濡れ光る肉壁に、容赦なく針が食い込んでいく。壁を突き通り、反対側からその鋭い先端を覗かせるまで。

私は、三本目の縫針を取り、陰核をつまむ。

「あつ、お願いです、そこは、そこは辛すぎます……」

雅美が振り返り、哀願する。

その顔に浮かんだ表情と声に、更に欲情を深めた私は、針をまっすぐに立てるようにして、勃起した彼女の陰核の先端に当てる。これから感じるであろう苦痛に身構える雅美が、すすり泣きの声を上げた。

私は一気に針を進める。

「！」

甲高い悲鳴が寝室に響き、彼女が身体を硬直させる。その瞬間、尿道から数滴の尿が漏れ出した。愛液と尿に濡れた膣口が、まるで一匹の動物のように蠢き、同調するように後孔が窄まる。愛液と尿とが混りあったものが太股に流れたとき、雅美は陰核を感じる鋭い苦痛の中で再び絶頂の叫びを張り上げる。

彼女の全身から力が抜けた。

私は、彰子の尻に頭をもたれかけて気を失っている雅美の、ぐったりした身体を押しつけ、その向こうの彰子の傷ついた尻を見詰める。

スポンをずり下げ、勃起した陰茎を取り出したとき、彰子が、涙の跡も乾かぬ顔を私に向けた。私の視線に込められた嗜虐の色と、凶器のようにそそり立つ陰茎とを彼女は見詰め、そしてそこに込められている残酷な意図を読み取る。

「許して……。お尻は辛すぎます。せめて、せめて、前で……」

私は、彰子の哀願の言葉を無視し、尻房を両手で掴み、押し広げる。

裂けて傷つき、雅美の唾液に濡れた後孔が、わずかにその内部のくすんだ赤色を覗かせていた。

私は、勃起し粘液に濡れた亀頭を、血に飾られた彼女の後孔に押し当てる。

「許してっ！」

彰子が叫んだ途端、私は陰茎を突き入れる。

裂けた尻を犯される彰子が悲鳴を張り上げ、背中で交差した手錠に繋がれた手が固く握り締められ、爪が白くなる。

一筋の真新しい血が太股に線を引き、私は激しく動きはじめる。

以下、次回へ